



アクティブ・ラーニング その3 授業づくりのために

◇ 最後に、「アクティブ・ラーニング」の授業づくりのために何をやればいいのかをまとめてみようと思います。

◇ いろいろと考えているうちに、アクティブ・ラーニングの授業では、まさしく、意欲づくりだと感じました。子どもが「学んでみたい」と思ったものほど、子どもたちの主体的で能動的な活動が期待できると感じたのです。

そこで、まず、子どもの関心や疑問をどのように捉えるかについてまとめてみます。ただ、「子どもの関心ありき」という立場ではなく、**価値ある学習に結びつく見込みがあるものを取り上げ、単元づくりをするという立場に立つ**ことを大事にしないといけないと思いました。また、**子どもの関心や疑問は、そのすべてを本人が意識しているとは限りませんし、固定的なものではなく、環境との相互作用の中で生まれたり、変化したりするものです。**ここに、**私たちの教材づくりへの意図的取組の意味**があります。

◇ このような授業をつくっていくために、田村氏は、その著書の中で「私たちが普段からやるべきことは、次の3つだ」と書かれています。

① 行う…視点を決めて自らの実践を積み上げよう

意図的に行う授業の回数を増やします。ちょっとした教材やワークシートを準備したり、好奇心を喚起する学習活動の設定や学習環境の構成を工夫したりすることを継続することが大事です。年に一回の研究授業も大事ですが、1年をかけて同じ視点での工夫を着実に繰り返すことも心掛けてみてください。このことは、以前まとめた「授業研究ではなく研究授業を」という視点につながるものです。

② 見る…多くの優れた授業実践を参観しよう

子どもの思いを汲み取ることが上手な先生、子どもの驚きをいつも生み出している先生、いつも教室が笑顔であふれている先生など、身のまわりにいる優れた先生方の実践を見ることが大事です。その時、できるだけ授業（指導）の記録を書き記してください。教室で起きているすべての出来事を書き記すくらいの意気込みがあるといいですね。

ただ、授業を見るといっても、1単位時間丸々というのは、自分の学級もありまでするので難しいです。そこで、「導入だけ見る」とか「グループ活動だけ見る」など授業の一部を見せてもらうことも大切です。「今日の授業は、導入での資料提示を工夫してみたから、そこだけ見てくれる？」という声かけができるようになると、いいですね。

昔、「授業は宝の山だ」と教えてくださった先輩がいました。人の授業を見て、自分にないものを探すというのも大切なことだと思っています。

③ 語る…日々の授業実践について語り合おう

授業づくりに自信がない人は、できるだけ先輩教師に授業などについて話を聞くことをお勧めします。休憩時間や放課後に積極的に話しかけてみるといいですね。今、年齢が近い人たちだけで話をするとか、ベテランの先生を囲んで話をするなど工夫ができるといいですね。放課後ミニ研修なんていうのもいいのではないのでしょうか。私は、サークル活動でそのことを学びました。

授業づくりのイメージをつけるには、努力が必要です。しかし、無理をした努力は長続きしません。そこで、無理のない程度でやれる3つのこと（行う、見る、語る）を考えてみました。参考にしてみてください。

◇ 3号にわたって「アクティブ・ラーニングの授業」についてまとめてみました。今回示したことがすべて正しいとは言えませんが、何らかのヒントにいただければ幸いです。

世の中が変わってきているにもかかわらず、どうして授業はなかなか変わらないのでしょうか？ それは、『授業をする側（教師）の意識の問題として、**変化を苦手とする意識**があることと**過去のイメージ（思い込み）**に縛られて、変化しなければならないことに気付かないということがある』と田村氏は述べられています。今回の「アクティブ・ラーニング」の考え方は、**それらを払拭するチャンス**です。**これまでの教育観を大きく変えないと対応できない**かもしれません。そのために、**子ども一人ひとりが本気になって学ぶとはどういうことか**を考え、**探究的で協同的な思考・発信型の授業に変えていくイメージを持つこと**がポイントではないでしょうか。ただ、このことは、**これまで私たちが大事にしてきた教師中心の指導の在り方をすべて否定しようとしているものではありません（中教審答申）**。分かりやすい話し方、板書の仕方、教材提示の仕方などは大事にしていきたいと思っています。個を生かす指導と集団を高める指導を二者対立的考えではなく、両者のバランスや調和を図りながら、常に子どもが真ん中にいるようにシフトチェンジしていくことが大事なのではないのでしょうか。

さて、授業づくりについてまとめてきましたが、「知識・技能の習得」や「能力の育成」に努めれば社会に必要とされる人材が育つかといえば意外と怪しいものです。人を育てるといふものは、**そう機械的な発想でうまくいくものではありません**。子どもたちが「未来は自分たちでつくるものだ」と思い、実際に身のまわりのことを変えようと動いた時、そこでの成功や失敗を通して、本当に未来を切り拓いていく能力や知識を獲得していくものです。**そのような経験**はどこでできるかという、**やはり学級づくりではないか**と思っています。学級づくりの中で、①子どもが自ら課題を見つける ②どうしたらその課題を解決できるかを考える ③必要な情報を集める ④集めた情報を使って話し合いをする ⑤自分たちが考えた方法で課題解決にあたる ということを繰り返し、「自分たちで考えたり動いたりすれば世の中を少しずつでも変えることができるかも知れない」という経験を積ませることが大事だと思っています。

私たちは、教育のプロとして、**パッション（情熱）**、**スペシャリティ（専門性）**、**ヒューマニティ（人間性）**という3つの資質を大事にしながら、子どもたちと関わっていきたいものです。

文責 スギタ